通商彙纂

外務省通商局　編纂

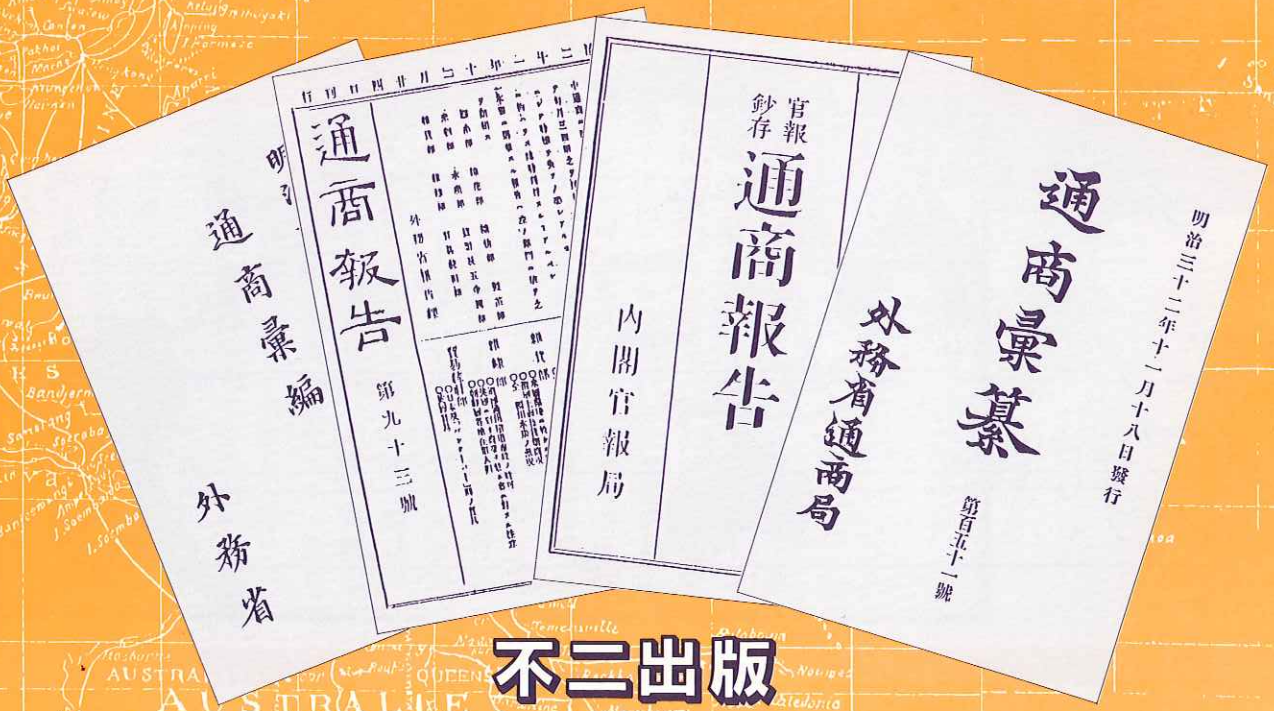
朝鮮・中国・東南アジア・欧米諸国・中南米・豪州に至る諸地域の国際・通商経済関係の情報を満載した「領事報告」の集大成。日本資本主義の生成・発展段階及び、各国経済活動を克明に記録した統計・報告書の第一級資料！

第Ⅰ期・全70巻【復刻版・明治14年～明治36年3月】

解説＝高嶋雅明（和歌山大学教授）

推薦＝梶村秀樹／田中正俊／角山　栄／村上勝彦／山口和雄

B5判・上製・総36、200頁■揃定価1、050、000円



不二出版

復刻の辞

本資料集は、外務省が編纂した領事報告（月報・年報・臨時報告等から成る）の集大成である。

「領事報告」とは、海外各地に駐在する領事が、本国政府に定期的に送付してきた、現地の通商経済情報や貿易報告の類である。

「領事報告」は、十九世紀国際経済史上きわめて重要な役割を果した。すでに欧米先進諸国は、領事による情報活動を重視し活用していたが、とりわけ後発国日本にとっては、後発であるがゆえに、その報告は、系統的かつ詳細であった。報告書の項目を見ても、商業・工業・水産・農業・鉱業・交通・貨幣及金融・関税・移民・電報・時事・雑報等多岐にわたり、その膨大さに圧倒される。

各国の経済貿易事情を掌握することによって、資本主義の発展及び帝国主義化への道を歩んだ日本を顧みるにあたって、本資料集の活用は、日本近代史・経済史・商業史研究はもちろんのこと、各国経済史を考察する上で不可欠な重要資料である。

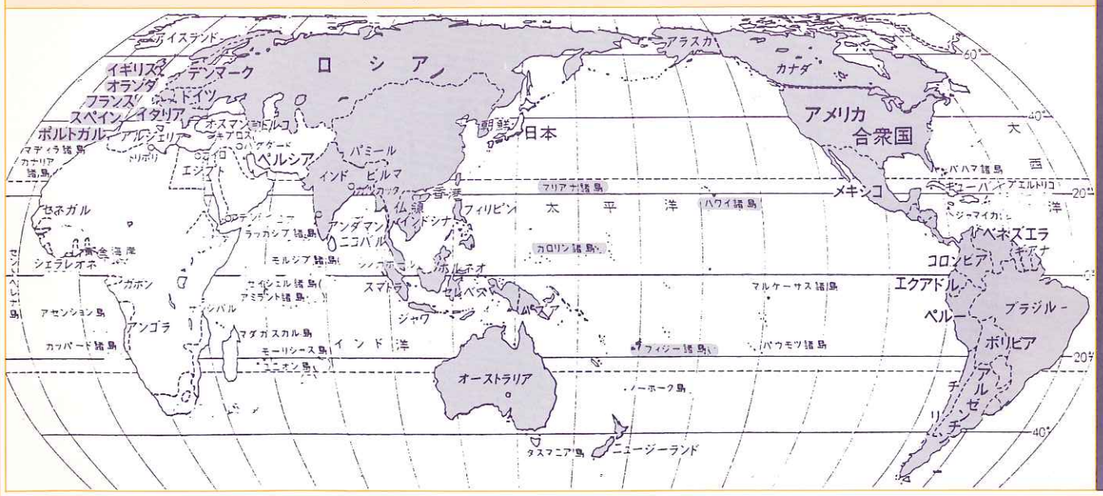
なお、本復刻版の構成は、外務省記録局（後に通商局）編纂の『通商彙編』（明治14～19年）、『通商報告』（明治19～22年）、『官報鈔存通商報告』（明治23年1～10月）及び（明治23年10月～26年12月は『官報』所蔵の通商報告欄を収録）、『通商彙纂』（明治26年12月～36年3月）であり、これを全70巻にまとめ第1期とし刊行するものである。（『通商彙纂』は、明治36年4月より大正2年3月まで発行されているが、この部分は第I期完結後、第II期として続刊の予定）

また、第一巻の巻頭に解説（高嶋雅明）を付し利用者の便を計った。

領事館の設置状況（明治3～36年）【角山栄編著『日本領事報告の研究』より】

中国	朝鮮	東南アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	豪州	他
上海 香港 厦門 天津 牛荘 芝罘	釜山 仁川 元山 ソウル 鎮南浦	シンガポール ボンベイ バンコク	ベニス ハーグ マルセイユ アンベルス	サンフランシスコ ニューヨーク モービル	メキシコ リオ リマ ブェノスアイレス	メルボルン ホバルト タウンスビル	ウラジオストック ホノルル コルサコフ
漢口 福州 広東 蘇州 杭州 沙市	馬山 木浦	マニラ コロンボ	ローマ ナポリ トリエスト	バンクーバー タコマ フィラデルフィア	ベレン	シドニー アデレード ウエリントン	
重慶			ミラノ ベルリン ハンブルグ メツジナ	シカゴ ニューオリンズ カルベストン			
			パリ ブリュッセル リヨン リバプール	ニューオールリンズ ボストン			
			ブレーメン オデッサ セントペテルブルグ	モントリオール シヤトル			
			アムステルダム グラスゴー ミドルスブラ				
			ウィーン パレルモ ジェノア バツーム				
			ボルドー チューリッヒ コペンハーゲン				
			ロッテルダム ルアーブル				

『通商彙纂』による報告対象国一覧（■の部分）



■本文内容見本

○香港之部

明治十四年一月中當港ヨリ本邦ヘ輸送貨物概表

領事安藤太郎

貨名	數量	貨名	數量	貨名	數量
砂糖	二万〇四百〇七俵	氷砂糖	貳百八十九俵	米	三千九百七十一俵
籐條	二十二捆	木綿糸	四百四包	絹織物	六十九箱
朱	四十七箱				
陶器	七箱				
染料	四十二箱				
鐵	二荷				
熟皮	四十四俵				
靴	五箱				
燒酒	五十一樽				
醋	八樽				
食物	百六十四箱				
商品	一千六百〇二箱 一千八百八十六荷				

明治十四年一月中在港トウ井ストト 十 捆 二十四包

○桑港之部

○公報第三號

保護税法ノ結果

米國保護税法ヲ始メテ實施セシヿハ今ヲ距ル大凡二十六年ニシテ其事ハ既ニ世人ノ腦裏ニ浸染シアレハ玆ニ其由來ヲ贅言スルヲ要セサルナリ而メ今日其税法實施以還米國ノ全局ニ如何ナル結果ヲ發生セシヤヲ看破スルヿ最大至要ノ務ト云フモ不可ナルナシ依テ千八百八十年ニ於テ調査セシ米國人口統計表ニ就テ其結果如何ヲ探鈎スルニ左ニ叙列セシ如キ發生ヲ爲セリ抑千八百五十年ト千八百六十年トノ十ケ年間ハ米國ニ於テ未タ保護税法ヲ實施セサルノ時代ニシテ製造品ノ世界ヲ觀察スルニ塊鐵(ステーショナリー)竿鐵及鋼鐵ノ如キ其製造ノ局量同一ニシテ所謂停滯ノ有樣ナリキ而メ千八百六十年ニ於テハ全國ヲ擧ケ其工業ニ使用セシ人ハ僅ニ三萬九千人ニ過キス然リト雖モ保護税法實施シ二十ケ年ノ後チ即チ千八百八十年ニ於テ其工業ニ力役スル者十四萬人ノ多キニ至レリ其資本金ノ如キハ千八百六十年ニ於テ米金五千萬弗ナリシモ二十ケ年後ハ二億三千萬弗ノ多額ト爲レリ其給料高ハ千八百六十年ニ於テ唯千貳百萬弗ノミナレモ千八百八十年ニハ五千五百萬弗ナリ又其消費セシ所ノ材料ニ眼ヲ轉スルニ千八百六十年ニハ三千四百萬弗ノ價値ナレモ千八百八十年ニ於テハ其價値殆ント六倍ノ數卽チ一億九千萬弗ニ增加スルニ至ルナリ蓋シ南北戰爭前ヲ回顧スルニ米國ニ於テ製鉄物ノ如キ至緊切要ナル生産物ノ一ケ年間ノ局量六千萬弗ノ價値ニ其程度ノ達セシ者アルヲ嘗テ覩サルナリ然リト雖モ米國ノ超然ト英國自由貿易主義ノ羈絆ヲ脫却セシヨリ二十ケ年ノ星霜ハ以テ能ク六千萬弗ノ高ヲ二億九千六百萬弗ノ程度ニ擴充スルニ至レリ然リ而メ此等ハ非凡抜群ノ稱呼ヲ與フヘキ結果ニ非ラス唯工業世界ノ一物ヲ擧ケ例ヲ示セシノミナリ何ナレハ則チ米國工業世界ニ於テ製鉄工業獨リ其光燿ヲ恣ニスルヿヲ得ス元來千八百六十年ニ於テ分析工業ハ其跡寥々トシテ絶テ見ザリシガ輪析分拆學科ノ進歩人ノ耳目ヲ丕變スルニ足リテ其工業モ亦旺盛ノ程度ニ達シ其光燿ヲ放ツヲ得タリ故ニ此分析工業ノ一點ハ以テ米國萬般ノ工業ノ旺盛進歩ヲトスルニ尙ホ餘リアリ且之ヲ昔年ノ人口調査表ニ推究セサルモ千八百八十年ノ分ニ據ルニ分析工業ハ同年間其資本ヲ用ユルヿ八千五百萬弗其給料ヲ拂フ事一千貳百萬弗其材料ヲ費スヿ八千萬弗ナリ又馬車製造ノ事ヲ引證センニ千八百六十年ニ於テハ外國輸入ヲ仰カス全ク米國ノ材料ノミヲ以テ米國遊樂馬車(アメリカン・プレジュール・カルレージ)ノ一輛タモ製作スルヿ能ハス而メ其材料ナル發條其他鋼鐵細工及絹織ノ粧飾物多クハ之ヲ外國輸入ニ依賴セサルヲ得サリキ然ルニ今日ニ於テハ米國能ク外國輸入品ト同一ナル善良ノ鋼鐵ヲ製作シ自國生産ノ生糸ヲ以テ華麗ノ粧飾ヲ織成スル

推薦の辞（五十音順）

近隣アジア諸国の情報を満載

梶村秀樹（神奈川大学教授）

開港後の朝鮮社会経済史の研究にとっての『通商彙纂』の史料的価値については、ことあたらしく強調するまでもなかろう。

日本資本主義の海外市場への関心のありように即応して、特に、『通商彙纂』刊行初期のころには、朝鮮についての情報量が、他のいかなる資料よりも豊富であったといえる。領事館報告の集成というその性格上、開港地の貿易・商況に関する記事がもっとも多く、実際日本商人の活動を鼓舞・支援する役割を果していたことが記事自体からも確認されるが、「内地巡回報告」の類は、その地域住民にとってはある意味で既知であるがゆえに活字になることがなかったデータを、刻明に記録にとどめているといえる。一つ一つは断片的な記事を丹念に関連づけていくなかで、国内流通のあらましやさらには生産過程についても、推論を組み立てていくことが可能になるのである。

同様のことは、もちろん日本資本主義の関心の範囲の拡大につれて時期を追ってだが、中国やその他の近隣アジア諸国の研究についてもいえそうだ。情報の絶対量は朝鮮についてほどではないにしても、東南アジア諸地域の経済史研究でも、British Consulars' Reports等々の横文字の史料と丁寧につきあわせていけば、実証の深みを増すことができるようなのである。

なお、従来からマイクロフィルムを利用することができ、また国会図書館などでまとめて閲覧することができた一八九四年の『通商彙纂』以降の部分はともかく、所蔵先が分散していて通覧することが困難だった『通商彙編』『通商報告』『官報鈔存通商報告』まで網羅して復刻されることは、有難いことである。

世界史のなかの近代日本を知るために

田中正俊（神田外語大学教授 東大名誉教授）

一般に『通商彙纂』と総称されるこのシリーズの最初の『通商彙編』が創刊された一八八一年は、憲法論議・自由民権運動・松方財政の開始など、近代日本の胎動の始まった年であった。やがて八四年、清仏戦争によってフランス帝国主義が中国を侵略すると、世界史のなかのアジアの情勢に敏感に反応した明治の日本人は、あるいは翌年の福沢諭吉の「脱亜論」に見られるように列強帝国主義に追随し、あるいはアジア主義者のようにこれに対抗する「興亜」のポーズをとりながら、いずれも近代国家形成の方策を、欧米主導の世界市場・国際政治を媒介とするアジア侵略として構想するにいたる。

こうして、日清戦争で朝鮮を侵略し、その下関条約（一八九五）によって列強の中国に対する資本進出のための尖兵の役割を演じた日本は、みずからも東アジア市場の開拓に乗り出す。韓国・清国をはじめアジアの英領植民地、ハワイ・マニラ、またヨーロッパ諸国駐在の日本の外務官僚の報告より成る『通商彙纂』は、このような情況下に彼らがアジア市場、さらに世界市場の商況調査を引っさげて、後進資本主義国日本の新興ブルジョア化のために情熱を傾けた貴重な記録となった。内容は、生糸・綿布などの商品のほか、貨幣・金融・交通・関税・商工業・農業・鉱業・水産・移民のみならず、「巡回報告」：「視察復命書」など、通商政策決定のための建議にまで及ぶ。これらは単なる計量的な調査資料であるにとどまらず、そこには、近代日本の形成過程における官僚たちの政治経済にかかわる意欲や意見がみなぎっている。研究資料を拾う情報源というより、むしろ、良かれ悪しかれ、当時の国民的思想の豊かな坩堝の観がある。

日本・アジアの近代史を研究する人々にとってのみならず、広く近代日本の国民思想をとらえようと志す研究者にとっても、『通商彙纂』は〝読む〟にあたいする古典と称することができるであろう。

明治三十六年中 自第二百四十七號 至改第五十七號 通商彙纂索引

甲、館別

一、定期報告ノ部

第一、韓國　頁數

一、在釜山帝國領事館　一
一、在馬山帝國領事館　一
一、在木浦帝國領事館　一
一、在群山帝國領事館分館　二
一、在仁川帝國領事館　二
一、在京城帝國領事館　二
一、在元山帝國領事館　二
一、在城津帝國領事館分館　三
一、在鎮南浦帝國領事館　三
一、在平壤帝國領事館分館　三

第二、清國

一、在清帝國公使館　三
一、在天津帝國總領事館　四
一、在芝罘帝國領事館　四
一、在上海帝國總領事館　四
一、在蘇州帝國領事館　五
一、在杭州帝國領事館　五
一、在漢口帝國領事館　六
一、在沙市帝國領事館　六
一、在重慶帝國領事館　六
一、在福州帝國領事館　六
一、在厦門帝國領事館　七

第三、英領

一、在孟買帝國領事館　七
一、在モントリヨール帝國總領事館　一〇
一、在タウンスヴヰール帝國領事館　一〇
一、在シドニー帝國總領事館　一〇
一、在メルボルン帝國名譽領事館　一一

第四、露領

一、在哥爾薩港帝國領事館　一一

第五、露國

一、在オデツサ帝國領事館　一一

第六、瑞西

一、在チユーリツヒ帝國名譽領事館　一一

第七、伊國

一、在ヴェニス帝國名譽領事館　一一

第八、佛國

一、在里昂帝國領事館　一二

第九、英國

一、在グラスゴー帝國名譽領事館　一三
一、在ミツドンスバラー帝國名譽領事館　一三

第十、獨國

一、在ブレーメン帝國名譽領事館　一三

第十一、米國

一、在桑港帝國領事館　一三
一、在シヤトル帝國領事館　一三
一、在シカゴ帝國領事館　一四
一、在紐育帝國總領事館　一四

第十二、米領

一、在ホノルル帝國總領事館　一六
一、在マニラ帝國領事館　六

第十三、南米

一、在伯帝國公使館　一六

第十四、外務省通商局　一七

海外通商情報の一大豊鉱

角山　栄（和歌山大学名誉教授）

恰度十年前の昭和五三年、第七回国際経済史学会大会がエジンバラで開催された。その小部会の一つに「領事報告の国際比較研究」と題するセッションがあった。そこで各国に交って、私は日本の領事報告について報告した。これを契機として、領事及び領事報告に関する研究が急速に進むことになった。急速に進んだといっても、私たちが先年京大人文科学研究所で共同研究「日本領事報告の研究」を組織したときでも、『通商彙編』など一連の資料を揃えるのに一苦労したのが実状である。しかしこのたび復刻版『通商彙纂』（全70巻）が出版され、容易に入手しうるようになったことは喜ばしい。

そもそも十九世紀五、六十年代以降、第一次大戦に到る時期は、各国通商競争が激化した時代である。通商競争を左右したのは各国の情報戦略であり、領事報告が重要性を増したのもこの時代である。その時世界市場に組込まれた日本、その日本が海外市場開拓に際し直面した国際通商事情は、とりわけ厳しいものがあった。どんな商品がどこで売れるのか、外国商品との競争に耐えられるのかどうか等々、現地の経済事情を報告する一方、海外市場調査を担当したのは領事であった。だから領事報告が日本経済の国際化、海外市場進出に果した役割は殊の外大きかった。

こんにち歴史研究が国際関係史へ拡がりつつある学界状況のなかで、『通商彙纂』は長年未発掘のまま放置されてきた一大豊鉱といってよい。例えばメルボルン領事報告からは、明治二十年代の豪州が日本米輸出の最大市場であったこと、またロンドン領事報告からは明治十年代末に英国で起った日本製小物インテリア・ブームとその社会経済的実状が伺えるなど、日本史研究者のみならず外国史研究者にとっても興味深い事実に充ちている。その他朝鮮、中国、東南アジア、インド、欧米諸国はもとより、中南米、豪州に到るまで、まさにグローバルなスケールで、多くの通商情報が収集され、研究者の手による発見と利用を待っているのである。

近代経済史研究に必須の一級資料

村上勝彦（東京経済大学助教授）

この度『通商彙纂』が復刻されることになった。近代日本の領事報告の中核をなす『通商彙纂』は、分量はたいへん膨大であるし、またその復刻出版もあまり市場価値がないのではないかと心配される。だが近代経済史を研究するものにとっては願ってもないことであり、不二出版の今回の英断にまず拍手をおくりたい。

近代日本の対外経済活動を現地に即して具体的かつ立体的に描きださずしては日本資本主義史、日本帝国主義史の豊富なイメージが得られない、そういう研究の段階にいまあると思う。現地駐在の領事からの定期的、系統的な報告がその第一級の資料であることはいうまでもない。欧米列強の半植民地的地位をいち早く脱し、列強に伍し、かつ近隣アジアに覇をとなえるにいたった近代日本の経済的営為の内で、領事報告の果たした役割はきわめて大きい。後発であるがために、危機意識が大であったためにか、日本の領事報告はたいへん系統立っておりかつ詳細である。商況、市場、貿易調査から現地経済、社会状況にいたるまでを克明に記した『通商彙纂』は、日本経済史にとっては言うまでもなく、外国経済史にとっても逸することのできない貴重な資料となっている。

すでに朝鮮、中国などについてはこれを駆使した研究も一部発表されている。近年、角山栄氏、高嶋雅明氏らの業績によってその重要性がひろく認められるにいたったが、その有する価値にふさわしく十分に利用されているとはまだまだ言えない。大きな原因は、利用の困難さにあった。大部のこの報告を一括して所蔵している機関とてなく、破損・欠落もかなりみられる。数年前にマイクロフィルムとして刊行されたが、不便さは覆いがたい。隣の韓国でも『通商彙纂』が復刻されたが、朝鮮の範囲に限定されている。だから今回の『通商彙纂』全部の復刻は待ち望んでいたものがついに出たという感じだ。この刊行を機に、日本経済史研究のいっそうの発展が期待されるところである。

二、臨時報告之部

第一、韓　國
一、在韓帝國公使館　一七
一、在釜山帝國領事館　一七
一、在馬山帝國領事館　一八
一、在木浦帝國領事館　一九
一、在群山帝國領事館分館　二〇
一、在仁川帝國領事館　二〇
一、在京城帝國領事館　二一
一、在元山帝國領事館　二二
一、在城津帝國領事館分館　二三
一、在鎭南浦帝國領事館　二四
一、在平壤帝國領事館分館　二四
第二、清　國
一、在清帝國公使館　二五
一、在牛莊帝國領事館　二五
一、在天津帝國總領事館　二七
一、在芝罘帝國領事館　二八
一、在上海帝國總領事館　二九
一、在蘇州帝國領事館　三五
一、在杭州帝國領事館　三五
一、在漢口帝國領事館　三六
一、在沙市帝國領事館　三八
一、在重慶帝國領事館　三九
一、在福州帝國領事館　四〇
一、在厦門帝國領事館　四一
第三、英　領
一、在香港帝國領事館　四二
一、在新嘉坡帝國領事館　四三
一、在孟買帝國領事館　四四
一、在モントリヨール帝國總領事館　四六
一、在晩香坡帝國領事館　四七
一、在タウンスヴヰール帝國領事館　四八
一、在シドニー帝國總領事館　四九
一、在ウエリングトン帝國名譽領事館　五〇
第四、暹　羅
一、在暹帝國公使館　五〇
一、在盤谷帝國領事館　五一
第五、露　領
一、在浦潮斯德帝國貿易事務館　五一
一、在哥爾薩港帝國領事館　五五
第六、露　國
一、在露帝國公使館　五五
一、在オデツサ帝國領事館　五六
第七、墺洪國
一、在墺帝國公使館　五七
一、在維納帝國名譽領事館　五七
第八、伊　國
一、在伊帝國領事館　五七
一、在ジエーア帝國名譽領事館　五七
第九、佛　國
一、在佛帝國公使館　五七
一、在里昂帝國領事館　五八
一、在ハーブル帝國名譽領事館　五九
第十、英　國
一、在英帝國公使館　六〇
一、在倫敦帝國總領事館
一、在リヴアープール帝國名譽領事館
第十一、白　國
一、在白帝國公使館　六三
一、在アンウエルス帝國領事館
第十二、和　蘭
一、在蘭帝國公使館　六四
一、在ロツテルダム帝國名譽領事館　六四

近代日本貿易史研究の宝庫

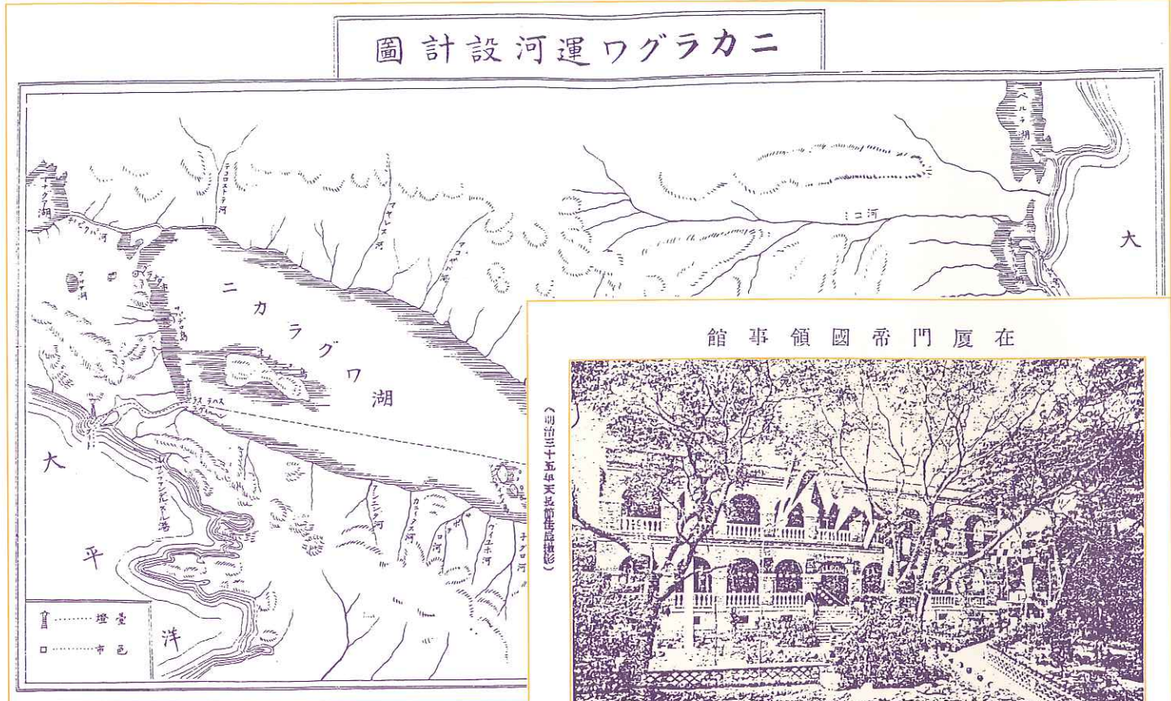
山口和雄（創価大学教授）

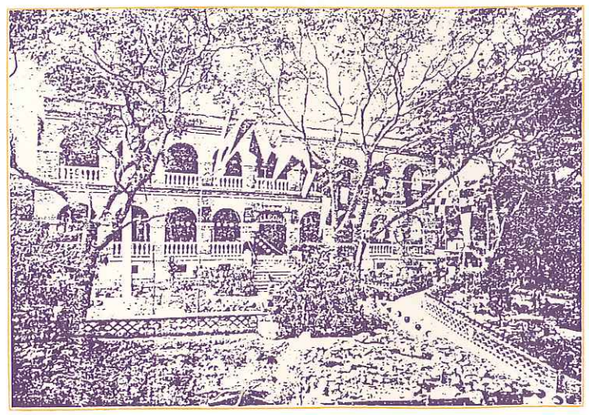
日本は、イギリスなどの先進諸国にくらべ一世紀もおくれて近代化に向かった。したがって、明治前期には、わが国の商社や銀行の海外支店は未だきわめて少なく、各国の主要都市に設けられたわが公使館、領事館からの報告が海外の事情を知る上で貴重な情報であった。外務省は、これらの報告のうち通商に関するものを『通商彙編』『通商報告』或いは『通商彙纂』と題して刊行した。

『通商彙編』は明治14年から同19年にかけ毎年1、2回ずつ刊行された。明治19年からは『通商報告』と改称されて毎月3、4回ずつ刊行されるようになり、同22年に及んでいる。その後、同27年からは『通商報告』に代って『通商彙纂』となり、明治36年までに、二五九号が刊行され、その後は改号となって、大正2年まで続刊された。

明治も後半になると、わが領事館数もふえ、報告の数も多くなり、内容も一段と豊富になった。試みに明治27年中の報告をみると、報告をした領事館は24館に及び、報告の種類も、穀類に関するもの14回、棉花・綿糸・織布に関するもの12回、蚕糸・絹布に関するもの28回、石炭に関するもの11回、製茶に関するもの5回、一般商業に関するもの39回、農業に関するもの7回、水産に関するもの9回、関税に関するもの9回、貨幣・銀塊に関するもの20回、計一五四回の多きに及んでいる。

以上述べたところによっても、これらの領事報告が近代日本貿易史の研究にとってはもちろん、当時の世界各地の経済事情を知る上にも貴重な資料であることは明らかであろう。しかるに、従来学界でもこれらの報告に必ずしも十分の注意が払われず、その所在も全体としては明らかではなかった。それが先般角山栄、高嶋雅明両教授らの努力によってまとめられ、雄松堂書店からマイクロフィルム版として出されたが、今回さらに不二出版によって明治36年までの分が復刻刊行されるにいたった。広く推薦いたしたい。





本文より抜粋（70％縮小）

第十三、獨逸
一、在獨帝國公使館　六四
一、在ブレーメン帝國名譽領事館　六五
第十四、北米
一、在米帝國公使館　六五
一、在桑港帝國領事館　六六
一、在シヤトル帝國領事館　六七
一、在シカゴ帝國領事館　六九
一、在紐育帝國總領事館　七一
一、在墨帝國公使館
一、在墨府帝國總領事館　七三
第十五、米領
一、在ホノルル帝國總領事館　七四
一、在マニラ帝國領事館　七五
第十六、南米
一、在伯帝國公使館　七八
一、在リヨデジヤネロー帝國總領事館　七九
一、在里馬帝國名譽領事館　七九
第十七、外務省通商局　八〇

乙、類別
一、蠶糸絹、毛布及毛類　八五
二、繭蠶種及養蠶　八七
三、蘆棉花、綿糸綿麻布及各種纖維植物類　八八
四、石炭、石油、蠟、諸油及製油原料品　九一
五、製茶並珈琲　九三
六、穀類並落花生　九五
七、酒類、製酒原料、煙草及鴉片　九八
八、食鹽及醤油　九九
九、砂糖、鶏卵及食料品　一〇〇
十、硫黄並燐寸　一〇一
十一、麥稈、眞田、花莚、陶器及漆器　一〇一
十二、染料並護謨　一〇二
十三、樟腦、薄荷並藥品　一〇二
十四、硝子、紙及雜貨類　一〇三
十五、動物、皮革、乳及肉類　一〇四
十六、魚類、海獸及水産業　一〇四
十七、密柑並果物　一〇七
十八、椎茸、蔬菜及其他植物類　一〇七
十九、山材、木材、石、瓦及建築用材　一〇七
二十、商業並市場　一〇八
二十一、工業並勞働者　一一〇
二十二、農業、牧畜、肥料及氣象　一一二
二十三、鑛業、金屬類並金屬製品　一一四
二十四、貨幣、金融、財政、銀行及債券　一一六
二十五、交通、通信機關及港灣　一二一
二十六、關税並各種税　一二九
二十七、移民、旅券及人口　一三〇
二十八、檢疫、衛生、醫師及保險　一三三
二十九、博覧會並各種會議　一三四
三十、豫算、條約、度量衡及各種法規　一三四
三十一、巡回報告、視察復命書及各地々理　一三六
三十二、雜件　一三八

總目次 終

通商彙纂 明治三十六年 改第二十一號

目次

◎絶東ニ於ケル露國貿易
本篇ハ露國人ノ著ナルカ稍正鵠ヲ得タルモノナリ
著者ハ特ニ滿洲蒙古比利亞ノ牛酪業開始

●商業

◎漢口新繭市況
本年ノ作柄ハ正ニ平年相場ハ上向キノ方ナリ
養蠶業ノ發達、桑園ノ

◎上海五月中重要輸
屑糸、繭、山羊毛、騎
味ニシテ輸出高減少セ
羊毛、生皮及山羊毛皮
ナセリ
麻及羽毛ノ二品ハ格別
向ケ輸出增加セリ

◎仁川五月中期米商
麥作不良ノ懸念ト外交
ノ相場ハ上調子、取引
二万二千二百石ナリ

◎重慶第一季貿易
清曆正月ヲ中間ニ挿メ
ヲ呈シ出入船舶數共ニ
稅收入額モ鴉片稅ヲ除キ他ハ皆增加セリ
綿糸、生金巾、「アニリン」染料ノ輸入增加
豚毛、藥材、麝香、羊毛牛皮等ノ輸出增加
鴉片ノ輸出減少、通過貿易ノ狀況

●互業

◎豪州クヰンスランド州三十五年

目次

通商彙纂（三十六年改）第二十一號

◎絶東ニ於ケル露國貿易

本篇ハ露國人ノ著ニシテ稍正鵠ヲ得タルモノナリ
著者ハ特ニ滿洲、蒙古地方ノ羊毛市場ニ着目シ又西比利亞ノ牛酪業開始ヲ勸誘シタリ

（三十六年五月十四日附在ガデツサ帝國領事館報告）

頃日當地ニ『絶東ニ於ケル露國ノ貿易』ト題スル一小冊子ノ刊行アリ署シテゲイシトールノ著ト云フ論スル所專ハラ露清貿易ニ止リ一言ノ日露貿易ニ及フモノナキハ吾人ニ取リテ聊カ失望ノ觀ナキニアラスト雖モ其露清貿易ヲ說キ將來ノ擴張策ヲ畫スルノ一條ハ實ニ詳細ヲ極メ露清貿易ニ志サス露國商人ノ爲メニ良指南車タルコトヲ得ヘク殊ニ著者カ露國商人ニ向テ滿州蒙古地方ニ於ケル羊毛市場ノ探求ヲ振奬シ或ハ西比利亞ニ牛酪業ノ開始ヲ勸誘スルノ一事ニ至リテハ著者ノ着眼カ正鵠ヲ得タルニ服セサルヲ得サルナリ、著者ノ來歷ハ未タ之ヲ詳知スルニ由ナキモ其材料ヲ官廳及東清鐵道及義勇艦隊等ノ筋ヨリ得タルノ一事幷ニ本書ノ刊行ト前後シテ大藏省週報カ著者ノ意見ノ梗概ヲ掲載シタルニ由リ之ヲ推ストキハ著者ハ恐ラクハ大藏省部內ノ一員ナルヘキカ夫ハ兎ニ角本書ノ記事ハ多少本邦當業者ノ參考ニ資スルニ足ルモノアルヲ以テ茲ニ其要領ヲ摘譯スヘシ

絶東ニ於ケル露國貿易

歐洲露國ト清國トヲ聯結スル彼ノ東清鐵道モ今ヤ將ニ竣工ヲ告ケントスルノ曉ニ際シ爾後絶東ニ於ケル露國ノ貿易カ彼ノ土地廣大ナル互市場ニ於テ如何ナル勢位ヲ占ムヘキカヲ研究講査スルハ今日ノ重要問題ナリト云ハサルヲ得ス抑々露清貿易ノ狀況ハ今日ニ至ルマテ萎靡振ハサル者ニシテ而カモ遡テ其起源ヲ探クレハ既ニ三百年以前ニ創マリ連綿繼續シ來リ其步程ノ形勢如何ヲ見ルニ明カニ之ヲ二時期ニ區畫スルヲ得ヘシ千八百五十五年ノ頃迄ハ露國ノ清國ニ對スル輸出ハ清國ノ露國ニ對スル輸入ヨリモ超過スルカ若クニ平衡スルノ情態ナリシカ千八百五十五年以後ハ全ク通商貿易ノ性質ヲ一變シ一方ニ於テハ露國ノ輸出カ萎靡スルト同時ニ他方ニ於テハ清國製茶ノ輸入カ增加シタルヲ以テ頓ミニ輸出入ノ平均ヲ失ヒ露國ノ爲メニハ大ニ不利益ナル勢ヲ呈セシナリ

今稅關局統計ニ基キ千八百八十三年ヨリ千八百九十七年マテノ各五ケ年間及千八百九十八年ヨリ千九百年マテノ三ケ年間ノ輸出入表ヲ示セハ左ノ如シ（單位千留）

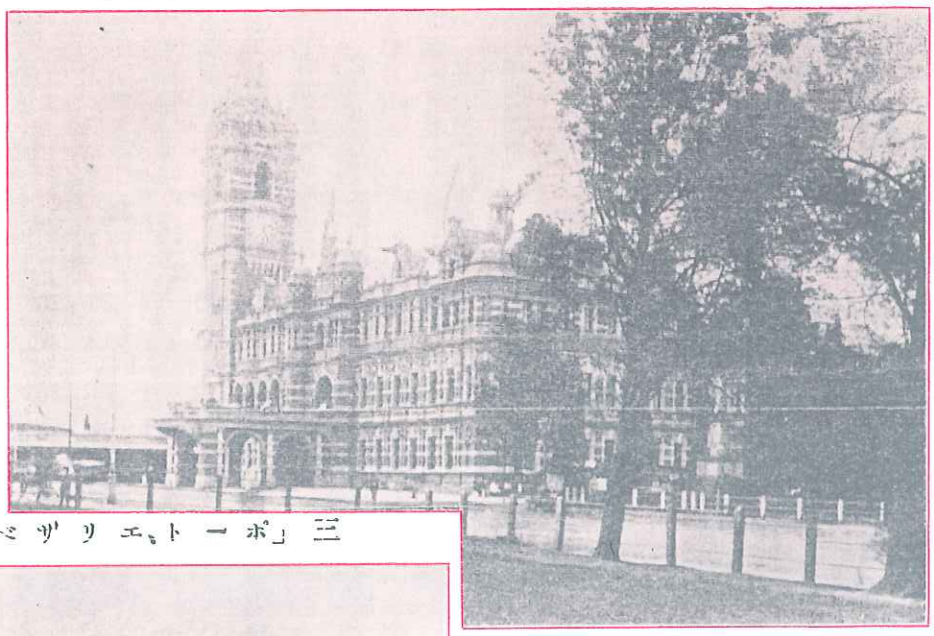
露國ヨリ輸出　露國ヘノ輸入　合計　輸入超過

自一八八三年至一八八七年	一〇、二五一	九五、六六六	一〇五、九一七	八五、四一五
自一八八八年至一八九二年	八、七三六	七四、四〇七	八三、一四三	六五、六七一
自一八九三年至一八九七年	二五、五五三	一九三、九五七	二一九、五一〇	一六八、四〇四
自一八九八年至一九〇〇年	二〇、四八五	一二九、七五三	一五〇、二三八	一〇九、二六八

前表ニ由テ之ヲ觀ルニ此季間ニ於ケル露國ヘノ輸入ハ常ニ輸出ニ超過シ而モ其超過高ハ全貿易ノ八割乃至九割ヲ占メリ今マ更ニ輒近十ケ年間ニ於ケル輸出入幷ニ其增減ヲ揭ケン

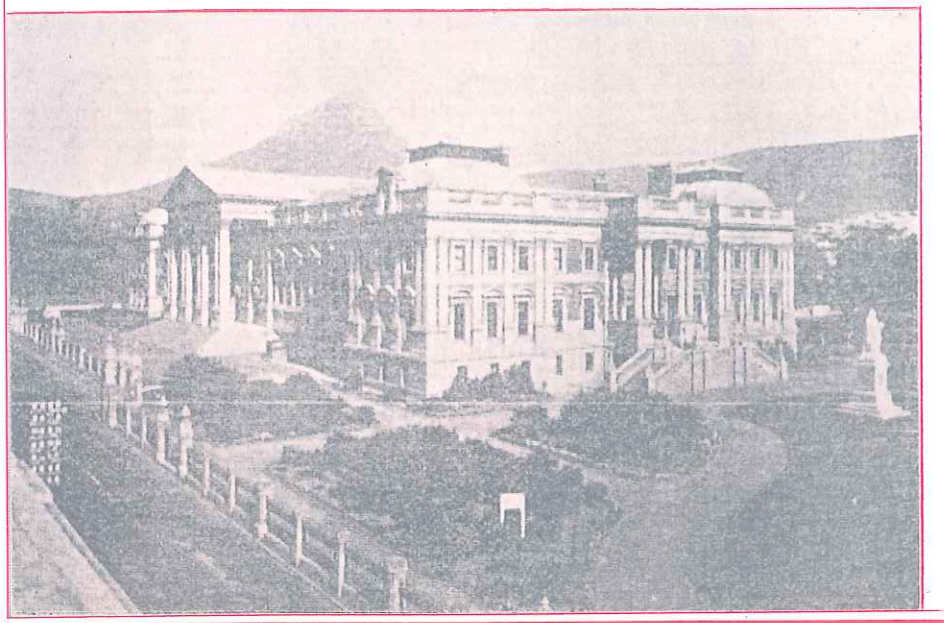
南阿弗利加各地眞景並風俗

一 「ナタール」殖民地首府「ピーターマーリツブルグ」市役所



三 「ポートエリザベス」ニ於ケル植物室

四 「ケープタウン」ニ於ケル議會建築物



一、在マニラ帝國領事館　一〇九
第二十一、中　米
一、在墨帝國公使館　一一一
第二十二、南　米
一、在伯帝國公使館　一一一
一、在リオデジヤネイロ帝國總領事館　一一二
一、在ブエノスアイレス帝國名譽領事館　一一二
一、在里馬帝國名譽領事館　一一三
第二十三、外務省
一、外務省通商局　一一三

通商彙纂 明治三十六年 改第二十一號

目次

◎絶東ニ於ケル露國貿易
本篇ハ露國人ノ著ナルカ稍正鵠ヲ得タルモノナリ
著者ハ特ニ滿洲蒙古比利亞ノ牛酪業開始

●商業

◎漢口新繭市況
本年ノ作柄ハ正ニ平年相場ハ上向キノ方ナリ
養蠶業ノ發達、桑園ノ

◎上海五月中重要輸
屑糸、繭、山羊毛、鬚味ニシテ輸出高減少セ
羊毛、生皮及山羊毛皮ナセリ
麻及羽毛ノ二品ハ格別向ケ輸出增加セリ

◎仁川五月中期米商
麥作不良ノ懸念ト外交ノ相場ハ上調子、取引二万二千二百石ナリ

◎重慶第一季貿易
清曆正月ヲ中間ニ挿メヲ呈シ出入船舶數共ニ

税收入額モ鴉片税ヲ除キ他ハ皆增加セリ
綿糸、生金巾、「アニリン」染料ノ輸入增加
豚毛、藥材、麝香、羊毛牛皮等ノ輸出增加
鴉片ノ輸出減少、通過貿易ノ狀況

●互業

◎豪洲クヰンスランド州三十五年

通商彙纂（三十六年改）第二十一號

◎絶東ニ於ケル露國貿易

本篇ハ露國人ノ著ニシテ稍正鵠ヲ得タルモノナリ
著者ハ特ニ滿洲、蒙古地方ノ羊毛市場ニ着目シ又西比利亞ノ牛酪業開始ヲ勸誘シタリ

（三十六年五月十四日附在ガデツサ帝國領事館報告）

頃日當地ニ『絶東ニ於ケル露國ノ貿易』ト題スル一小冊子ノ刊行アリ署シテゲイシトールノ著ト云フ論スル所專ハラ露清貿易ニ止リ一言ノ日露貿易ニ及フモノナキハ吾人ニ取リテ聊カ失望ノ觀ナキニアラスト雖モ其露清貿易ヲ說キ將來ノ擴張策ヲ畫スルノ一條ハ實ニ詳細ヲ極メ露清貿易ニ志サス露國商人ノ爲メニ良指南車タルコトヲ得ヘク殊ニ著者カ露國商人ニ向テ滿州蒙古地方ニ於ケル羊毛市場ノ探求ヲ振奬シ或ハ西比利亞ニ牛酪業ノ開始ヲ勸誘スルノ一事ニ至リテハ著者ノ着眼カ正鵠ヲ得タルニ服セサルヲ得サルナリ、著者ノ來歷ハ未タ之ヲ詳知スルニ由ナキモ其材料ヲ官廳及東清鐵道及義勇艦隊等ノ筋ヨリ得タルノ一事幷ニ本書ノ刊行ト前後シテ大藏省週報カ著者ノ意見ノ梗概ヲ揭載シタルニ由リ之ヲ推ストキハ著者ハ恐ラクハ大藏省部内ノ一員ナルヘキカ夫ハ兎ニ角本書ノ記事ハ多少本邦當業者ノ參考ニ資スルニ足ルモノアルヲ以テ玆ニ其要領ヲ摘譯スヘシ

絶東ニ於ケル露國貿易

歐洲露國ト清國トヲ聯結スル彼ノ東清鐵道モ今ヤ將ニ竣工ヲ告ケントスルノ曉ニ際シ爾後絶東ニ於ケル露國ノ貿易カ彼ノ土地廣大ナル互市場ニ於テ如何ナル勢位ヲ占ムヘキカヲ研究講査スルハ今日ノ重要問題ナリト云ハサルヲ得ス抑々露清貿易ノ狀況ハ今日ニ至ルマテ萎靡振ハサル者ニシテ而カモ遡テ其起源ヲ探クレハ既ニ三百年以前ニ創マリ連綿繼續シ來リ其步程ノ形勢如何ヲ見ルニ明カニ之ヲ二時期ニ區畫スルヲ得ヘシ千八百五十五年ノ頃迄ハ露國ノ清國ニ對スル輸出ハ清國ノ露國ニ對スル輸入ヨリモ超過スルカ若クニ平衡スルノ情態ナリシカ千八百五十五年以後ハ全ク通商貿易ノ性質ヲ一變シ一方ニ於テハ露國ノ輸出カ萎靡スルト同時ニ他方ニ於テハ清國製茶ノ輸入カ增加シタルヲ以テ頓ミニ輸出入ノ平均ヲ失ヒ露國ノ爲メニハ大ニ不利益ナル勢ヲ呈セシナリ

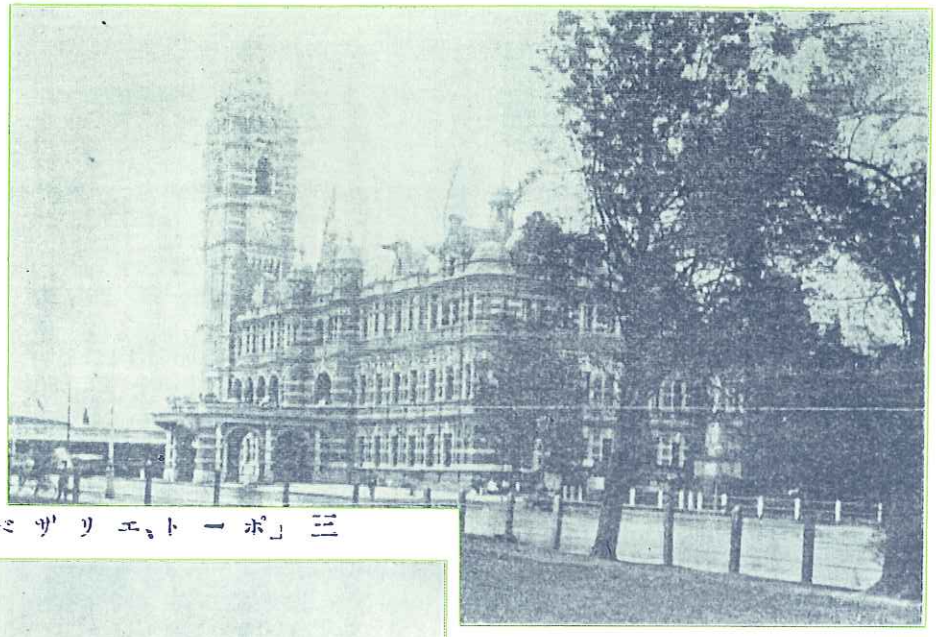
今稅關局統計ニ基キ千八百八十三年ヨリ千八百九十七年マテノ各五ヶ年間及千八百九十八年ヨリ千九百年マテノ三ヶ年間ノ輸出入表ヲ示セハ左ノ如シ（單位千留）

	露國ヨリ輸出	露國ヘノ輸入	合計	輸入超過
自一八八三年至一八八七年	一〇、二五一	九五、六六六	一〇五、九一七	八五、四一五
自一八八八年至一八九二年	八、七三六	七四、四〇七	八三、一四三	六五、六七一
自一八九三年至一八九七年	二五、五五三	一九三、九五七	二一九、五一〇	一六八、四〇四
自一八九八年至一九〇〇年	二〇、四八五	一三九、七五三	一五〇、二三八	一〇九、二六八

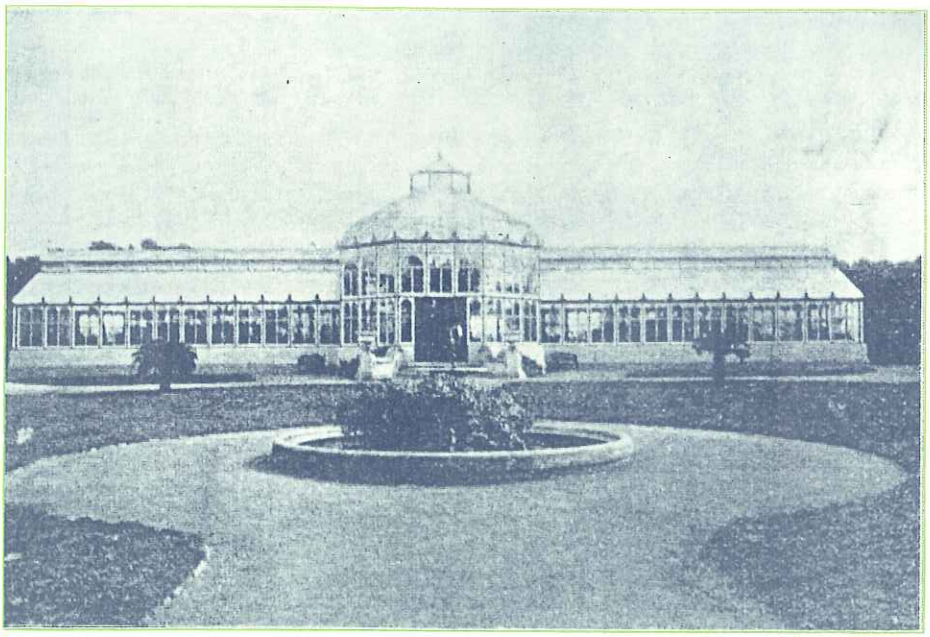
前表ニ由テ之ヲ觀ルニ此季間ニ於ケル露國ヘノ輸入ハ常ニ輸出ニ超過シ而モ其超過高ハ全貿易ノ八割乃至九割ヲ占メリ今マ更ニ輓近十ヶ年間ニ於ケル輸出入幷ニ其增減ヲ揭ケン

南阿弗利加各地眞景並風俗

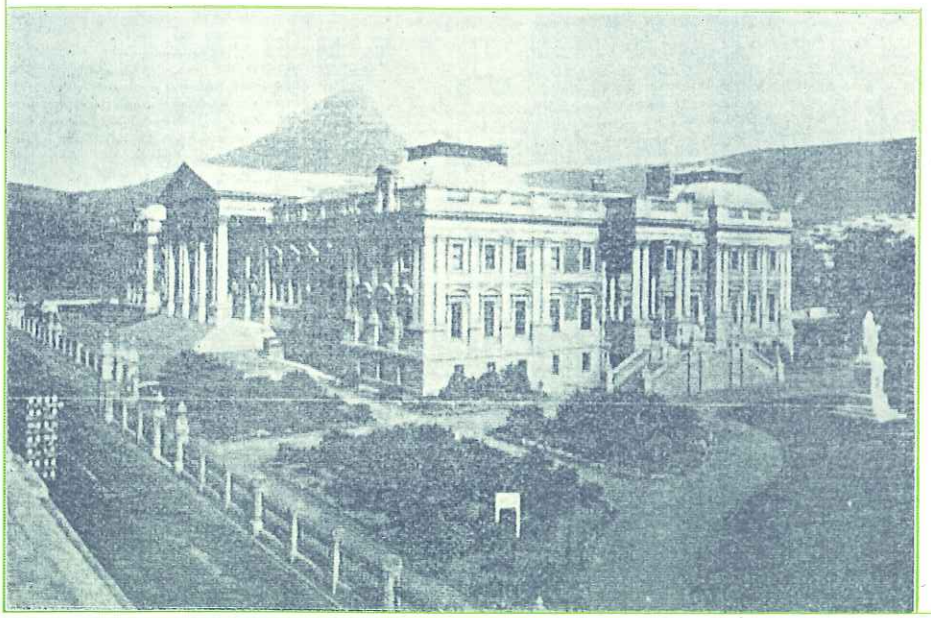
一 「ナタール」殖民地首府「ピーターマーリツブルグ」市役所



三 「ボートエリザベス」ニ於ケル植物室



四 「ケープタウン」ニ於ケル議會建築物



一、在マニラ帝國領事館 一〇九
第二十一、中米
一、在墨帝國公使館 一一一
第二十二、南米
一、在伯帝國公使館 一一一
一、在リオデジヤネイロ帝國總領事館 一一二
一、在ブエノスアイレス帝國名譽領事館 一一二
一、在里馬帝國名譽領事館 一一三
第二十三、外務省
一、外務省通商局 一一三

通商彙纂【第Ⅰ期】全70巻

復刻版概要

■収録原本の内容
『通商彙編』
――明治14年～19年
『通商報告』
――明治19年12月～22年12月
『官報鈔存通商報告』
――明治23年1月～10月
『官報』通商報告欄再録
――明治23年10月～26年12月
『通商彙纂』
――明治26年12月～36年3月

■B5判／上製／中性紙使用
総頁数36、200頁

■解説＝高嶋雅明（和歌山大学教授）
――第1巻の巻頭に収録

■配本＝全14回配本

■揃定価1、050、000円

配本一覧

	'88年度配本分				'89年度配本分				'90年度配本分				'91年度配本分	
配本回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回
収録巻数	第1～5巻	第6～10巻	第11～15巻	第16～20巻	第21～25巻	第26～30巻	第31～35巻	第36～40巻	第41～45巻	第46～50巻	第51～55巻	第56～60巻	第61～65巻	第66～70巻
収録年月	明治14年～18年	明治19年～21年11月	明治21年11月～25年12月	明治26年1月～27年8月	明治27年9月～28年9月	明治28年10月～29年8月	明治29年9月～30年8月	明治30年8月～31年4月	明治31年5月～32年1月	明治32年1月～32年10月	明治32年11月～33年12月	明治33年12月～34年11月	明治34年11月～35年8月	明治35年8月～36年3月
配本年月	'88年5月	'88年8月	'88年11月	'89年2月	'89年5月	'89年8月	'89年11月	'90年2月	'90年5月	'90年8月	'90年11月	'91年2月	'91年5月	'91年8月
定価	各配本ごと75,000円													

不二出版
〒113 東京都文京区向丘一―二―一二
TEL ○三―八一二―四四三三
FAX ○三―八一二―四四六四
振替 〈東京〉六―九四〇八四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

通商彙纂【第II期】全60巻

復刻版概要

■収録原本の内容

『通商彙纂』（外務省発行）

明治36年4月～明治41年12月

『通商彙纂』の原本は、明治36年3月までは通巻号数が表記されていたが、明治36年4月以降は、毎月6回発行の定期刊行となり、各年ごとの号数表記に変っている。

■B5判／上製／中性紙使用

総頁数30、648頁

■解説＝高嶋雅明（和歌山大学教授）

――――第1巻の巻頭に収録

■配本＝第15回から第26回まで

全12回配本

■本体価格＝

各配本85、000円

■揃定価

1、020、000円

配本一覧

	'91年度配本分		'92年度配本分				'93年度配本分				'94年度配本分	
配本回数	第15回	第16回	第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	第23回	第24回	第25回	第26回
収録巻数	第71～75巻	第76～80巻	第81～85巻	第86～90巻	第91～95巻	第96～100巻	第101～105巻	第106～110巻	第111～115巻	第116～120巻	第121～125巻	第126～130巻
収録年月	明治36年4月～36年10月	明治36年10月～37年4月	明治37年4月～37年11月	明治37年11月～38年5月	明治38年6月～38年11月	明治38年11月～39年5月	明治39年5月～39年11月	明治39年11月～40年5月	明治40年5月～40年10月	明治40年10月～41年3月	明治41年4月～41年8月	明治41年8月～41年12月
配本年月	'91年11月	'92年2月	'92年5月	'92年8月	'92年11月	'93年2月	'93年5月	'93年8月	'93年11月	'94年2月	'94年5月	'94年8月
価格	各配本ごと85,000円											

続刊予定

『通商彙纂』（第III期）全55巻　明治42年1月～大正2年3月

■B5判／上製／総頁数28、258頁　■配本＝94年11月～97年5月全11回配本

■本体予定価格＝各配本95、000円／揃価格1、045、000円

不二出版

〒113 東京都文京区向丘一―二―一二

TEL ○三―三八一二―四四三三

FAX ○三―三八一二―四四六四

振替 〈東京〉六―九四〇八四

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

通商彙纂【第Ⅲ期】全55巻

復刻版概要

■収録原本の内容

『通商彙纂』（外務省発行）
明治42年1月～大正2年3月

明治27年1月創刊の『通商彙纂』は、途中、通巻号数表記、各年ごとの号数表記を経て、大正2年3月まで刊行される。その後、同年4月より『通商公報』として継続刊行される。

■B5判／上製／中性紙使用
総頁数28、258頁

■解説＝高嶋雅明（和歌山大学教授）
――第1巻の巻頭に収録

■配本＝第27回から第37回まで
全11回配本

■本体価格＝
各配本95、000円

■揃定価
1、045、000円

配本一覧

	'94年度		'95年度				'96年度				'97年度
配本回数	第27回	第28回	第29回	第30回	第31回	第32回	第33回	第34回	第35回	第36回	第37回
収録巻数	第131～135巻	第136～140巻	第141～145巻	第146～150巻	第151～155巻	第156～160巻	第161～165巻	第166～170巻	第171～175巻	第176～180巻	第181～185巻
収録年月	明治42年1月～42年6月	明治42年6月～42年11月	明治42年11月～43年5月	明治43年5月～43年10月	明治43年10月～44年2月	明治44年2月～44年6月	明治44年6月～44年10月	明治44年10月～45年1月	明治45年1月～45年5月	明治45年5月～大正元年11月	大正元年11月～2年3月
配本年月	'94年11月	'95年2月	'95年5月	'95年8月	'95年11月	'96年2月	'96年5月	'96年8月	'96年11月	'97年2月	'97年5月
価格	各配本ごと95,000円										

続刊予定

『通商公報』 大正2年4月～大正13年12月

■『通商彙纂』の継続後誌『通商公報』は、大正2年4月から大正13年12月1、228号（通巻号数）まで刊行された。継続復刻予定。

不二出版
〒113 東京都文京区向丘一-二-一二
TEL ○三-三八一二-四四三三
FAX ○三-三八一二-四四六四
振替 ○○一六○-二-九四○八四

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。